



紫斑病や吸実性カメムシ類の適期防除と高温対策を！

1 現在の生育

○7月31日現在の生育は、主茎長が47.5cm(平年比119%)、葉数が11.7葉(同差+2.0葉)、分枝の発生数は2.0本/個体(同差+0.2本/個体)となっています。

○気温が高く推移しているため主茎長は長く、葉数の展開は早くなりました。また、好天が続いた影響で1個体あたりの分枝数が多くなっています。過度に乾燥しているため、ほとんどのほ場で葉が裏返っています。また、一部のほ場では、下葉の黄化・枯れがみられ、播種が遅く生育量が確保できていないほ場では、干ばつによって生育が停滞しています。

3 開花後の高温・干ばつ対策

○管内の開花盛期は7月30日(平年差-2日)となっています。

○生育調査結果(7月31日現在)

	主茎長 (cm)	葉数 (葉)	分枝数 (本/個体)
R 7	47.5	11.7	2.0
R 6	50.0	10.9	1.5
平 年	40.1	9.7	1.8
平年比	119%	+2.0	+0.2

管内6カ所平均値。

2 開花期追肥

○水田転換初年目や地力の高いほ場では必要ありませんが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場や、湿害により生育不良となったほ場では、開花期の追肥により増収効果が期待できます。

○追肥は、開花期から開花10日後に実施し、硫酸または尿素を窒素成分量で10a当たり5～10kg施用します。

3 開花後の高温・干ばつ対策

○7月中の降水量が極めて少なく、大豆の葉が立ち、葉の裏面が見えるほ場が多く見られます。用水が確保できるほ場では、明きょかん水等を実施し、高温・干ばつ対策をしましょう。

○大豆は開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、天候やほ場状況に応じてかん水を検討します。

○土壌水分保持のため、暗きょ栓を閉めます。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図ります。

【畦間かん水】

○畦間かん水の目安は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施してください。

○30a以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畦の崩壊と水口付近の湿害を防ぎます。ほ場(区画)全体に水が行き渡ったら水口をしっかり止め、速やかに排水を行います。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行います。

○ただし、水回りの悪いほ場、速やかな排水が行えないほ場では、湿害等が発生する場合がありますため実施しません。

【明きょへのかん水】

○排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水します。

【地下かんがいシステムが備わっているほ場】

- 暗きょを閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努めます。
- 地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施してください。このときの地下水位は20～30cm程度に設定し、1日給水した後に暗きょ栓を解放して排水します。

4 除草対策

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合は、大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行います。薬剤によって使用時期等が異なるため使用基準を遵守し、適期に防除します。

	農薬名	使用時期及び 使用薬量 (/10 a)	希釈水量 (L/10 a)
畦間処理	大豆バサグラン液剤※	だいた生育期 収穫45日前 300～500 mL	100
	ザクサ液剤	だいた8葉期～収穫28日前 300～500 mL	100～150
	ラウンドアップマックスロード	だいた8葉期～収穫前日 200～500 mL	25～50
畦間・株間処理	バスタ液剤	だいた6葉期～収穫28日前 300～500 mL	100～150
雑草茎葉兼土壌散布 (畦間・株間処理)	ロロックス	だいた3葉期～収穫30日前 100～200 g	70～150
雑草茎葉塗布	タッチダウン i Q	生育期、収穫7日前 0.1 mLを1～3か所/株	2倍希釈

※適用品種はリュウホウとする。

注：畦間及び畦間・株間処理では、薬害防止のため専用の飛散防止カバーや専用ノズルを使用します。

5 病虫害対策

- 気温が高くなると害虫の発生が増加する傾向にあります。東北地方1ヶ月予報（仙台管区気象台7月31日発表）では気温は高いと予想されているため、今後の病虫害の発生状況に注意し、ほ場をよく観察してください。

①紫斑病

- 令和7年7月29日発表の令和7年度農作物病虫害発生予察情報（以下、予察情報）によると、紫斑病の感染時期はやや早く、感染量が多いと予報されています。
- 開花状況を確認し、開花期20～30日後までに薬剤散布を行ってください。
(管内開花盛期：7月30日)。
- 開花が早いほ場は、マメシンクイガとの同時防除で効果が劣る可能性がありますので、紫斑病とマメシンクイガの防除はそれぞれ適期に行ってください。
- アミスター20フロアブルは、県内で耐性菌の発生が確認されています。薬効低下の恐れのあるほ場では使用を避けてください。

表－1 紫斑病の防除薬剤

農薬名	使用量又は希釈倍数 (散布液量)	散布時期及び回数
フセキフロアブル	4,000倍	150～300L /10a 1～2回(1回防除が基本で着 莢期に降雨が多い場合は2回 防除) 1回目：開花期20～30日後 2回目：1回目の約10日後
ジマンダイセン水和剤	400倍	
ペンコゼブ水和剤		
トライフロアブル	1,000倍	
ニマイバー水和剤	1,000～2,000倍	
プランダム乳剤25	3,000～5,000倍	
クミガードSC	500倍	
Zボルドー		
Zボルドー粉剤DL	3kg/10a	

(注意事項)

- ①ニマイバー水和剤、プランダム乳剤25、フセキフロアブル、トライフロアブルは耐性菌出現回避のため、各1回の使用とする。
- ②薬剤は莢によく付着するように散布する。
- ③ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する(収穫45日前)。

②吸実性カメムシ類

- 予察情報では、吸実性カメムシ類（ホソヘリカメムシ）の発生量が多いと予報されています。
- 加害期間は莢がつき始める頃から莢が黄熟する頃で、初夏～盛夏が高温、多照の年に発生が多くなります。吸実被害を受けると落莢、不稔粒、変色粒などが発生し、収量や品質の低下につながります。

表－2 吸実性カメムシ類の防除薬剤

農薬名	使用量又は希釈倍数 (散布液量)	散布時期
トレボン粉剤DL	4kg/10a	8月中旬 ～ 9月上旬 (1～2回)
アグロスリン乳剤	2,000倍	
エルサン乳剤	1,000倍	
スミチオン乳剤	1,000倍	
トレボン乳剤・EW	1,000倍	
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍	

※ 9月上旬散布は、マメシクイガにも有効である。薬剤は莢によく付着するように散布する

③ツメクサガ

- 管内でも発生が多く、食害がみられます。今後の薬剤による防除は、8月上旬から中旬にエルサン乳剤1,000倍、トレボン乳剤1,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍液を100～300 L/10 a散布します。

④マメシクイガ

- 予察情報によると、マメシクイガの発生時期・発生量は平年並と予想されています。
- 成虫は8月20日頃から確認され、9月始めに発生ピークを迎えます。表面に産卵し、ふ化した幼虫が莢内に食入しクチカケ豆を作ります。薬剤は莢に十分付着するように散布します。

表－3 マメシクイガの防除薬剤

農薬名	使用量又は希釈倍数 (散布液量)	散布時期及び回数
トレボン粉剤DL	4kg/10a	アグロスリン乳剤、 アディオオン乳剤、 パーマチオン水和剤 8月下旬～9月上旬(1回) 他の薬剤 9月上旬(1～2回)
アグロスリン乳剤	2,000倍	
アディオオン乳剤	3,000倍	
エルサン乳剤	1,000倍	
グレース乳剤	2,000～3,000倍	
スミチオン乳剤	1,000倍	
トレボン乳剤・EW	1,000倍	
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍	
プレバソフフロアブル5	4,000倍	

※ アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤はカメムシ類にも有効である。

農作業中に熱中症になる人が増えています。予防対策を十分に行い、熱中症を防ぎましょう。